

## 小泉八雲のことども(続き)

根 本 重 照

### ハーン先生と愛弟子

前号で名前が出た大谷正信は、ハーン先生が来日早々の処女出版である例の「知られざる日本の面影 (Glimpses of Unfamiliar Japan)」の「英語教師の日記から」(ハーンが松江尋常中学校の教師をしていた時の)と題する章に次のように述べられている。"正信は滅多に来ない(先生の自宅へ)が、来る時は、何時も一人で来るのである。細っそりした、女性的な顔貌の美少年で、控目で、全く落ち着いた様子をしていて、上品である。大分と真面目な方で、笑顔も余り見せない。声をあげて笑うのを私は未だ聞いたことがないのである。級の一番であった。余り苦勞をしないで、その席次に居たようである。採集したり分類したりして暇な時間の大部分を、植物学の研究に捧げている。彼の、男子の家族は皆そうなのであるが、彼は音楽家なのである。西洋では、見ることも、聞くことも出来ないような種類の楽器を演奏する。その中には、大理石の笛や、不思議な形と音色の竹の笛もある。それから、<sup>しよ</sup>笙という、鋭い、シナの楽器もある。銀の枠に入った、長短いろいろの、17本もの管がある、一種の吹奏楽器である。大鼓、小鼓、笛、<sup>ひちりき</sup>箏、更には、胴が細長い、<sup>つせ</sup>鍾のような<sup>かつこ</sup>恰好の鼓という小さな太鼓などの説明も彼が始めてしてくれた。大きな仏式の儀式があると、正信とその父や弟たちは、寺の楽人となって、皇慶だの抜頭だのという音楽を演奏する。こんな音楽は、西洋人の耳には、始の間は、何の興味もないのだが、聞いているにつれて、分ってくる。そして、一種特別な、不思議な興味を覚えるようになる。正信が来るのは何時でも、私が興味をもちそうな、仏教か神道のお祭に参列するやうにと、招きに来るのである。"と。

大谷少年は、ハーン先生が、熊本第五高等中学校へ転任するにあたり、送別の辞を読んでいる。親愛なる先生

先生は、私たちが、これまでに就きました、最もよい、また一番情け深い教師の一人でありました。先生の最も懇篤な授業によって得ました知識に対して、私たちは、衷心御礼を申し上げます。我校の生徒はいずれも、せめて三年間は、おとどまり下さることを希望致して居りました。それで先生が九州へおいでのことに、ご決心になったことを知りました時、私達は皆悲しさに気落ちしたのであります。私達は、お止め申す方法が無いかと、校長に願いましたが、それは出来ないことを知りました。

今この告別の際、私達はその感情を言い表わす言葉を持ちません。私達は、記念の品として、日本刀を差し上げました。誠に、つまらない、みっともないものであります。ただ、私達の感謝の印として、お気に留めていただけるかと考えただけであります。私達は、先生の最も懇切な授業を決して忘れません。そして、私達一同は先生が永久に、健康で、幸福であられんことを願います。

島根県尋常中学校生徒一同代表 大谷正信

大谷正信は、松江市殿町に生まれた。生家は、藩政時代の終の頃、松江で酒造業を大大的に営んでいた。行政区画として島根県ができた時、県の高官大河内重敬が同家に寄寓していたというから、その地での裕福な名門であったと思われる。父善之助は、地方の文化人ともいべき存在であって喜多流謡曲の愛好者であり、母親は、きりきりしゃんと家事を切り回す有能活発な主婦であった。正信は、このような家庭で“蝶よ花よ”とでもいべき少年時代を過していた。彼は、中学校を卒業後は、更に上級の学校へと進んで将来は学問で身を立てることを宿願としていたということである。好事魔多しとか、中学卒業前に、父が人に唆かされて、極めて好調であったその家業を突然やめて、全く未経験の洋服屋の仕事に手を出してしまった。失敗に失敗を重ねた俳句の果ては、正信の表現によれば“全く家産を尽して、ただ一つ残った裏町の別宅にて、逼塞した生活を送るべく余儀なくされた。”という苦境に立ち至った。（“己がこと、人のこと”）

彼は明治25年第三高等学校（京都）に入学、学制の改革で後に第二高等学校（仙台）へ転じた。この両校で俳人高浜虚子や河東碧梧桐が同級で、初めて俳句を教えられて、斯道に馴染むことになった。29年第二高等学校を卒業し、東京帝国大学英文学科に入学した。前述の通りの経済状態であったので生家からの学資送金は全く期待できなかった。既述したように、外山正一学長からの再三の要請<sup>いん</sup>難く、ハーンが英文学教授ウッドの後任者として、その年に、同大学に着任したことは、彼にとって、全くの僥倖であった。彼は自分の宿望を訴えたところ、恩師はそれに対して暖い同情を表明された上で、一つの提案をされた。“自分が日本文化について研究し又その著作をするに必要な課題を提起する。君は、それに必要な資料を蒐集して、私に提供することを条件に、一定の金額を君に支払うというのはどうであろう”というものである。大谷はこれを受諾した。かくして、彼は大学での勉学が可能となったのである。以下、ハーンからの書翰を摘録して、両者の関係を見て行きたいと思う。（注：以下、訳者とは大谷自身）

1. God helps those who help themselves. 天は自らを助ける者を助ける。とかや——自助のすすめ。

1896年（明治29年）12月6日

（前略）私は今度、君に別な機会を提供するが、非常に異った条件の下にである。今後は君が、私からどんな援助を受けようとも、それは、それと引替に君がする努力に全く頼るであろう。私は、君が君自らを助ける間だけ、君を助けよう。毎月、私は、その月中に、それに対して、書

くべき題目を一つ君に与えよう。そしてその作がよく出来て居るならば、それに対して、君は、これまでもらっていた金額を受けるであろう。もし、よく出来ていなければ、やり直すようにと、私は、それを君に送り返す。そして、それが相当に出来るまでは、君は一文ももらわないのだ。その取計は、ただ月月のことにしよう。そして、未来における、その継続如何は、私をば喜ばせそして、私に役立つ、君自らの力如何に頼らなければならぬ。もし君が、私を喜ばすことが出来ず、あるいは、役に立つことが出来なければ、もっと好い人が君の地位を取らなければならない。そんな好機会を得ることを喜ぶ者は幾百人と居るのだ。

もし、君が、私が君に頼むものをするのが実際に出来ないのならば、それは、君が大学で時間を空費している証拠だ。しかし、君の友人達は、"彼には文学的才能がある"と、私に言って聞かせた。もし、君にそれがあるならば、英語を駆使用する上においての、君の不熟練は、何も関係無かろう。そんな才能は、観察と感情によることであるから。要するに、君は一年に、十二か十三篇——その中には、探究を要するものもあろうが——書かねば、金を少しももらえないという条件の下に、私のために書かなければならない。それから、他に何かすることを私は時折君に頼むかも知れぬ。そんなことが有り得るということを予め言っておく。君はそれを予期して居なければならぬ。(中略)二人の関係は、君がもしこの条件を受け入れるなら、君が大学の課程を終え或はそれを退くまでは、ただ事業上の関係だと知っていて欲しい。

## 2. 仏教に関係がある諺の蒐集依頼のこと。

1897年（明治30年）4月29日

今日は、どうか仏教に縁がある諺の蒐集をしてくれ。仏教に関する言葉即ち果報、縁、因果、因縁、<sup>おくるま</sup>小車、前世、未来の再生などという語を含んでいる日本の諺を私は意味しているのである。余り沢山には、君の目に無理をするほどには、決して書くな。君に毎月相当の分量を書かせたい。ただ練習としても。その方が君の利益になろう。だが私は必要がないのに、君の身を疲らせるようには乞わない。

## 3. エチケットののこと

同年6月16日

君は異った試験三つに出席することを要求されるであろう。商人か、貧乏で郵税が出せない人かへ、でなければ、決して何人へも郵便切手を送るなよ。

## 4. 金銭の事務的処理。

同年6月27日

君が帰省するもしないも、私には、なんの関係もないことである。1896——7の一年間に、私が、君に払った金の総額の完全な受領書に君が署名して欲しい。私は来学年については、全く何の約

束をも君に対してしない。進んで君を援助するかどうかは、その事情次第のことで、今はその事を君に説明する余暇はない。この夏中私がどこに居ようと、君からの手紙は、多分私に届くであろう。そして私は、もし少し暇が出来たならば、松江宛にして、詳しい手紙を多分書くであろう。

#### 5. 金銭的援助の条件の確認。

同年6月28日

君は、私の手紙の意味を了解したようには思われぬ。私が、署名するようにと証文を送ったのは学年の終に当って、受けとった金の受領書に、君が署名して、どういう事態に在るかを君が正確に知るということは、正当だからである。君は今までのところ負債を作らないでいることが出来た。もし、君が大学に止まっているなら、毎年の終に、あるいわ君が私から金を受けとらなくなる時の終に、同様な証文に署名することを乞うであろう。

この前の春、私は前もって約束ごとはもうしないということ。君の未来は君自らに頼ること。そして、君の失敗に対しては私は責任を負わないということ。等を君に話した。私はその条件を変えないし何事をも約束はしない。君の業績の結果を調べて見ることの外は、私が君の生活の費用を払っているのではないのだ。君が自らその生活の費用を払っているのである。事はこうして置こう。君が帰省するについて私は何も言うことはない。が私は君の旅行の費用やそれに伴う他の費用を払うことはしない。君は休暇中人手に頼らず暮らして行かなければならない。何か書きたいと思うなら、後にそのことについて話そう。君に題目を与えてもよい。だが君はこの前の約束を忘れてはいけないよ。

#### 6. 欠席する場合には。

同年10月29日

君がそんなにも酷い<sup>わづら</sup>煩いをしていたことを知って、全く気の毒に思う。が、再びよくなりつつありやがて学校へ出席出来ようと聞いて安心した。先日あの私人教授（訳者注：エミール・エック教授）が君の欠席のことを尋ねたから、君は本当に出席できないのだから赦してやらなければならないと私はあれに話しておいた。それであの人は満足した。だがあの人は非常に<sup>やかま</sup>喧し屋だから、今後は君の病気の時は、あの人に届書を送るか、又は早く私に知らせてくれるがよかろう。君が欠席数日になるまでは、君の病気のことを私は知らなかったのだから。何時か、来月の題目のことについて君に手紙を書こう。その間に、抜けた講義を出来るだけ書きうつすがよかろう。今は課程の大変重要な部分だから。殊に英文学全史に関しての講義を。早く君がいつものように教室へ出られるように希望して。

#### 7. ハーンの“真の<sup>によ</sup>詩歌<sup>がかん</sup>如是我観”

同年12月

先づ第一に君に言いたいのが、私が、君の所謂「俗な」歌を好まないと考えているのは、それは君の非常な思慮、実に、非常な思慮、途方もない思慮である。それこそが正しく私が最も欲しいものなのだ。君が今月私に翻訳してくれた全部の歌の中で、私が非常に好きなものは、たった一つしか見つからなかった。ところが、それは都都逸であった。

さて、君が或は驚くかも知れぬ事を言っ、私は君にショックを与えようとしている。しかしそれを言わなければ、君は、私が要求するものを、終に理解しないであろう。君が私に集めてくれた学生作の沢山の歌全体の中で、詩と呼び得るものは、17首しかなかった。そしてその17首も、より高等な吟味にかけてみると、殆ど全部が或る古い歌人の思想および感情の反映であることが分った。君が翻訳したあの書物（訳者注：外山、井上、上田三博士の新体詩集）はといえば、あれには全然真の詩というものを一つも見出すことが出来ず、また独創的なものは、殆ど全く見出すことが出来なかった。

それから、今度はこの事全体について、私の正直な意見を言っ、聞かせよう。現代の上品な詩歌、それから君が私に集めてくれた詩歌の大部分、これらは殆ど価値がない。あるいわ全く価値がない。これに反して、人足や漁夫、水夫、百姓や職人が歌う「俗な」歌は非常に美しい真の詩である。英国の、フランスの、イタリーの、ドイツの、あるいはロシアの大詩人がこれを賞讃することであろう。君は勿論、これは私の無知と、私の愚鈍さを示すだけのことだと考えるであろう。しかし、どうか、このことを一寸反省してみよ。ハイネ、シェークスピア、コールデロン、ペトラルカ、ハフィズ、サーディが作った偉大な詩は、それを他国語の散文に訳しても、依然として偉大な詩である。どんな国語に移しても、人の感情あるいわ想像力に訴える。しかし翻訳の出来ない詩は、世界文学においては、全然何の価値も持たない。真の詩とさえ言えない。これは語が持つ意味のただの遊戯である。真の詩は、ただの語の意味とは何の関係も持たぬのである。それは想像であり、情緒であり、熱情であり、思想であるのだ。だからこそ、力があり真理があるのである。或る一国語の特質にその存在を負う詩は、時間の浪費であって、決して人の心の中に生きることは出来ない。（中略）

勿論、日本の古典的な歌に、美しいものがあることを私は知っている。どんな国語に移しても、永久に生きている程の美しさを持った「万葉集」と「古今集」との翻訳を私は所持している。しかし、この二書は、それが美しいのは、語の意義によるものではなくて、観念と感情とによるものである。恐らくは、君はこれを甚だ馬鹿らしいと思ひ、野蛮だと思っ、であろうが、私の要求するところのものを君に理解させる助けにはなろう。卑見によれば、「俗な」歌は、無上の価値をもっている。（以下略）。

さて、筆者はここらあたりで、一先づ目先を変えて、彼が明治33年9月に、東京文科大学において、新学期最初の講義として行っ、下記の題名のものを引用して見よう。

「赤裸裸の詩」

私（ハーン）は、詩という言葉について、私の定義——やや独断的ではあるが——を諸君が承認するように要求せねばならない。私の考では、“詩とは、真正の詩とは、主として深く心を興奮させ情を動かす韻文の作品を指す”と。換言すれば、感情の詩である。これが詩というものの真の文学的意義なのである。だから、<sup>たとえ</sup>縦令少しも韻文のようではなくても、往往ある種の散文が、すぐれた詩であると称せられる次第である。（中略）日本の歌人は、秀逸の詩は、それを読んだ後で人の心に或るもの——現わされてはいないが、暗示されたもの——人に<sup>しやうどう</sup>疎動を与えるもの——を残さねばならないと述べている。だから頗る簡単な言葉を用いて、上の条件を実現し得るような外国の詩の美点を、諸君は十分よく理解することができるであろう。無論、学者風の言葉、ギリシャ語やラテン語などの、専門学者にのみ分かり得る言葉が使われている場合、このような詩は、殆ど問題外である。

少くとも英語の場合には、一般民衆の言葉こそ、或る種類の情緒的詩に対する最上の用語なのである。しかし、方言に依存したり、俗語に墮落したりしなくても、極めて平易な普通の英語を用いて——もし、詩人が真に衷情から感じているならば——偉大なる結果を生じ得るのである。ここに、小さいけれども、頗る有名な詩がある。私は、それを、赤裸裸の詩——何等の装飾もない、純なる詩の一例であると称したい。それは、ただ一音節の押韻を持っているに過ぎない。しかし、たとえ少しも押韻がなかったとしても、それは依然優れた詩であるだろう。更にまた、それは性質上、日本の歌の精神に頗る似ているものであると、私は言わねばならない。しかし、諸君は自分で判断することが出来る。

Four ducks on a pond,	池には、4羽の家鴨
A grass bank beyond,	かなたは、草の生えた土手、
A blue sky of spring,	春の青空、
White clouds on the wing;	白雲が飛んでいる。
What a little thing	何という些細なことを
To remember for years——	多年覚えていたことだろう——
To remember with tears!	涙ながらに覚えている。

諸君がこれを読んでいって、最後の句へ来るまで、これは別に何でもない。そこへ来てから、始めて、全体の光景が突然、諸君の心頭を衝いて現われてくる。そして、諸君は理解する。それは或る流離の人が、故郷のことを思っている。あらゆる他の思い出は朦朧たる中に、ぴかりと輝いた少年時代の、或る刹那の記憶がある。それで、これは頗る有名で、且つまた真に驚嘆すべき詩であると私は思う。その中に少しも技巧はないけれども、それは歌のように簡単である。

さて、英詩の中には、上の様な情感横溢の作品は余程少数である。序に付言すれば、この詩は、アイルランド人、ウィリアム・エリンガム：William Allingham (1829—1889) の作である。こ

れについて顕著な事実は、斯くの如き<sup>びょう</sup>眇たる一小詩によって与えられる効果の点である。しかし、英詩人の中には、この平淡の極致、妙技の靈域に達した人が幾人かある。そして、その一人は、チャールズ・キングズリー：Charles Kingsley (1819—1875) である。諸君は、このような情感力を示している彼の歌を幾つか知っている。しかし、私は諸君が、エアリー・ビーコン：Airly Beacon. という詩を知っているかどうか知らない。それは、一つの小さな歌である。しかし、それは人生の悲劇の物語である。諸君が、一たびそれを読んだ後では、決して忘れることが出来ない。そして、諸君は読んでいって、最後の行<sup>びょう</sup>へ来るまでは、何のことだか分らない。私は、諸君に説明しておくのであるが、エアリー・ビーコンは、スコットランドの一つの高い丘で、その絶頂は、眺望がよろしい。昔そこで、<sup>のろし</sup>狼煙を揚げることになっていたので、その丘は「<sup>エアリー・ビーコン</sup>高い狼煙」と呼ばれていたのである。このことを念頭に留めておけば、諸君は、この詩の効果を一層よく判断し得るであろう。私は、また、諸君に注意せねばならないことは、英米では、若い娘は、所謂求婚、すなわち、結婚の誓約の下に愛慕されることに関して、余程の自由が許されていることである。この観念は、娘たるものは、男と二人だけである際に自重するに足る意志の力をもたねばならぬということである。もし彼女がその力を持たないならば、その場合、彼女は、エアリー・ビーコンの歌を歌わねばならなくなるであろう。しかし、この詩にある娘は、多分それ程に不幸ではなかったのであろう。私たちは彼女が妻となり、それから、非常に早く寡婦となったものと、想像することが出来る。この歌には、何とも明言していないが。

Airly Beacon, Airly Beacon;	懐かしいエアリー・ビーコンの山、
Oh, the pleasant sight to see	恋人が登ってくる間、
Shires and towns from Airly Beacon	州や町を見おろして、
While my love climbed up to me.	おお、何という楽しい眺であったことが

Airly Beacon, Airly Beacon;	懐かしいエアリー・ビーコンの山、
Oh, the happy hours we lay	羊齒の中に埋もれ、寝ころんで、
Deep in fern on Airly Beacon,	夏の日を一日中、互に愛を口説きながら、
Courting through the summer's day!	おお何という楽しい時を過ごしたことが

Airly Beacon, Airly Beacon;	悲しいエアリー・ビーコンの山、
Oh, the weary haunt for me!	私には、何という物憂い場所だろう。
All alone on Airly Beacon,	独りぼっちで山の上で、
With his baby on my knee!	あの人の赤ん坊を抱きながら。

或る韻文が真の詩、情感の詩を含んでいるか否かを検定する最上の方法は、こうである。——それを他の国語の散文に訳して、しかも、それが尚、情感に訴えることが出来るかどうかである。

もし、それが出来るならば、そこに真の詩が存しているのである。もし、それが出来ないならばそれは真の詩ではなく、単に韻文に過ぎない。さて、西洋の有名な詩は、実際大部分この検定法に及第している。今引用した一小詩もそうである。英国詩壇諸大作家の傑作の中のいくつかは、矢張りそうである。(中略)これが私の所謂、赤裸裸の詩である。これは、その効果を生ぜしめるためには、表現の飾り、或は、押韻の装飾に頼っているのではない。恐らく、諸君は、この詩の精髓は、往往散文にも見出されるといっただろう。それは本当である。実際に詩的散文と称するものが存在している。しかし、音節と押韻が、感情的表現の魅力を非常に強めることも真実である。(中略)

私が、今学年に試みようとする詩に関する講義においては、翻訳の実験に耐え得るやうな詩を含むものだけを選択しようと考えている。英詩の中には、この条件に適しないのが沢山ある。例えば、あのポープ：Alexander pope (1688—1744) の詩の如き18世紀の詩を日本の学生に授けるのは、大なる誤だと私は思う。それは韻文としては、英語で書かれた中では恐らくは最も秀逸なものであろうが、詩としては何でもない。詩の精髓は、ポープの中には存在しない。また18世紀派の大部分の中にも、それを見出すことは出来ない。その時代は、あらゆる感情を抑制する風習であった。しかし、ポープは英国における英文学生にとっては有益な研究である。何故なら、英国の学生は単にその形式の研究から、また極めて僅かな言葉を用いた、緊密な力強い表現から、大いに得るところがあるからである。日本においては、立場が正反対である。諸君にとって外国の詩の価値は形式の方面に存するのではない。外国の形式を日本語に再現し得られないのは、フランス語の詩の、英語におけるのと同様である。諸君にとって外国の詩の価値は、あらゆる詩の精髓をなすもの、感情と想像にこそ存する。外国人の感情と想像は、将来の日本の詩の美と至高の性質に対して、幾分貢献することになるだろう。その点において、非常に研究の価値があるだろうと私は考える。

しかし、外国の詩が、単に正確な韻文ということしか意味しない場合は、諸君はそれに対して少しの時間をも浪費しない方がよい。力強い感情を含み、しかも、また立派な形式をさえも備えた偉大なる詩が沢山あるのだから。と。

さて「彼(ハーン)が一たび教壇(東京大学の)に立つと、たちまち、詩的雰囲気<sup>(マ)</sup>が、堂に充ち、これまでの東京大学の英語学的だった性格を、一ぺんに英文学的に<sup>(マ)</sup> 枢軸的<sup>(マ)</sup> 転回させた。正に、東大講義の花として、他科の学生までが盗聴に潜入し、また、市井の人でも、学生から、わざわざ、その筆記を借りて読んだという詩人蒲原有明のような例もある。」(木村 毅氏)と。

ハーンは、真の詩の検定法は他国語へ翻訳してみることである旨を述べ、実例を挙げつつ、学生の切実な理解が可能であるようにと平易且つ興味深く説き来り説き去っているのは流石<sup>さすが</sup>である。自己の知的蓄積の粋の優れた伝達者である。世間の大方の、英文学(一般的に文学)論流の無味乾燥、抽象的、晦渋にして更にはBig wordの頻出と深遠性?のため、徒に<sup>いたずら</sup>好学者の<sup>あくび</sup>欠伸の連発と拒絶反応を誘発する体のそれとは、画然と対照的である。



8. 蛙の本が欲しい。

同年12月30日

今朝、17綴音詩の付け加ページの本を受けとった。それには面白いものがある。それを送ったことに対して君にお礼を述べる。蛙に関しての君の大阪の友人（訳者注：俳人、故水落露石）のその本（訳者注：「圭虫句集」を露石から送ってもらって先生へ捧呈した）が入手可能ならば、来年中いつでも、私は1冊買い求めたい。その本は、<sup>きつと</sup>屹度興味あるものに違いない。新年（訳者注：その年は諒闇であった）東京では客を受けることはしない習慣だそうな。だから何もしない。

9. ちょっと借問。

1898年（明治31年）6月

次のことを、君から知ることが肝要である。その男の子が窓から頭を出して「とおちゃんが居るよ」と言ったのは、実際にあった出来事か、それとも想像になったことか。私は、あの作文（訳者注：各学年を通じて出された進級試験の作文。題は“列車の中にて”）そのものとは無関係の理由のために知りたい。急いで返事をする必要はない。君が手紙を書く暇がある時でよい。知らせてくれ。

10. 君には芸術的素質がある。

同年6月

あの出来事は想像によったものと聞いて、私は喜ぶ。そのことは、君の芸術的観念を前よりも高く私に思わせるからである。真の文学的的技巧というものは、実際にあった或はありそうな事実を、想像的連鎖に巧みに結合することに頗る多く依存するものである。芸術的文学が生硬な真実であり得ないことは、写真が絵画と比較にならないのに劣らない。次に記すのは、近代フランスの作家の最大なるものの一人の文から抜いた短いセンテンスである。

「芸術は、真実を対象とはしない。真実は科学に要求すべきものである。それが、その対象だからである。それは文学に要求すべきものではない。文学は、その対象として、美より他のものは持たず、また持ち得なぬから」（アナトール・フランス）

勿論、これは余りに文字通りに解してはならないが、大体において、これは作家が常に心頭に抱いているべき真理の中の、最も肝要なものである。私は次のようにつけ加えよう。「真理を含まないものは、どんなものも美しくはあり得ないこと。また、或る想像を美しからしめることは、それを一部分真実ならしめることを意味しているのだ」これを記憶せよ。

君の英語はまだ拙いが、作文は芸術的であったので、自分は驚きも喜びもした。君は、戯曲的意義において、事実を組み合わせることを稍理解して居り、自然なそして単純な出来事を用いて読者の情緒に訴えることも理解している。芸術の根柢はそこにある。それ以外は幾年もの実習に

よって始めて出来る。私が言う心とは、圧縮された力と高級な琢磨との秘訣である。君が自国語で文章を書く時は、今後は稍圧縮の方面を狙えと忠告しよう。(以下省略)

11. 君は不運ではないのだ。

同年8月

私は、君がまた病気であることを気の毒に思う。だが、君には少少道徳的な薬が要るようだ。それで君に少少与えようと思う。君は不運ではない。そして君はまだ、この世の艱難について何も知ってはいない。君は今の年齢の倍になるまではそれを知ることは出来ない。金が足りないに拘らず、君は異常な補助の機会を得て来ている。そして、君は、その教育の最も困難な部分を通過してしまった。その教育は社会上の愉楽と尊敬とをもつ一つの位置を占め得る力を君に与えるものである。ところが、それは不運というものではない。

身体の上の少少の病気は誰にもやってくる。死ぬ学生は多い。狂気になるものも多い。馬鹿なことをして、一生を台無にするものも多い。君は、勉強をよくし、心は健全で、習慣は着実。君が、それを損いさえしなければ、成功を意味すべき三つの条件が具わっている。それは不運というものではない。最後に、君は眼がよく頭脳が明晰だ。それが無いために、何千人もの人が失敗しなければならないのだ。君は確に不運ではないのである。

私は、16才の少年の時、私の血縁の者が(そのうちの或る人は頗る富裕であったのに)誰一人として私の教育を完成させるために、私を補助するために、一文も金を払おうとはしなかった。私は君が決してならないだろうもの即ち下男にならざるを得なかった。そして、私はあらゆる困難があるにも拘らず、自分で自分を教育せざるを得なかった。私は半ば視力を失った。私は病床に2年いた。誰一人として私を補助するものはなかった。でも私は、西洋生活のあらゆる贅沢に取りまかれ富裕な家庭で育て上られた身であった。だから、我が親しき子よ。いらいらして、自分は不運だと思ったりするな。君は幸運な子だ。そして、人に可愛がられて居り、人生に成功しそうな人間だ。(以下省略)

12. 誤用の単語について一言。

同年8月30日

アイドル (Idol) という語を、日本の紳士淑女は、文明の宗教の“像 (Image)” のことに用いてはならない。その理由は、この語が、伝道師どもの使用によって、下品な語にされているからである。日本人が仏教の“像 (Image)” のことを“アイドル (Idol)” と言っているのを、情理が分った諸外国人が聞くと、その日本人は下品な人だと想像する。その語源の美しいギリシャ語であるアイドーロンは、詩にも浪漫的散文にも価値をもっているが、普通の散文には、Statue, Figure, Image, Representation等が妥当な語である。(以下略)

13. 叱責

同年11月19日

君は、一と事に対して、一度以上頼まなければならないように（私を）するべきではない。私は或る書物1冊の名前と、7つの徽号の名を漢字を添えて、ローマ字で書くことを君に頼んだ。それをするのに、ただの4、5分しかかからないであろう。大して重要なことではないが、といって、君がそれをしないでよい理由は決してない。

19. ハーン先生宛の贈物に対しての謝礼。

同年12月28日

今日松江から送られた贈物と、君がそれに付けてよこした非常に親切な手紙を受け取った。あれよりも善い贈物は、或はあれよりももっと真実な愉快を私に与え得る贈物は、受け取り得ないだろうと思う。実に奇妙な品物だ。あの不思議な織物は。そして、またそれ特有の頗る浪漫的な品だ。あの織物の全体に亘っている黒い小斑点が、人がずっと昔書いた手紙や詩やその他の文言の文字で出来ているのだと思うと、私は、あれを永久に珍重することを君に確言しなければならない。私があ品の品物を好きであるからだけではなくて、特に、君の母人がそれを織ったものであるからである。私は、自分専用の冬着物に仕立てさせようと思っている。そして季節に応じて、私の書齋でそれを着ていよう。あれは、確に文学者が着るべき種類の織地である。君と君の一家の人たちに、特に君の親切な母人に多謝する。そして幸福な年が君等に來たらんことを熱心に希望する。

君が今月してくれた蒐集で、今まで知らなかった方面に大いに私の興味が引かれた。歌の一つ一つは想像力に訴える所は誠に少ないのであるが、全体の調子と感情とは、頗る注目し得るもので“民衆作品”の性質の如何について、数数の新しい考を私に起こさせる（中略）

来月の題目については、私は同一種類の材料をもっと得ることを喜ぶ。もう少したつてから、私は、幽霊の題の詩歌を少し欲しいと思う。ということ述べておいてもよいであろう。しかし、この方は急ぎはしない。

君と君の一家の人達に、幸福な新年が來たらんこと更に最善の好意を繰り返して。

15. 君は自分でその教育費を払ったのだ。私に謝恩の要無し。君の文学上での成功を望む。

同年6月30日

君の大学における3年の課程は終わった。そして私は、同封の証書を君に呈し得ることを喜ばしく思う。私は稍詳細の点に立ち入って居るが、それはただ君をして、君は男らしく君自身の教育の費用を實際に支払って居るのであり、私に関する限りにおいて君は全然何等の恩義を負うてはいないのである。ということ悟らしめんがためである。勿論、誰でもが、君の仕事を私がしたように処置したり、丁度私がしたと同じにそれを使用することは出来なかつたであろう。だが

そのことは、君が実際に東京での君の3年間の費用を支払ったのであるという事実には少しも差障がない。

私が君に対して親切であったと装いはしない。そして、あの仕事は時々退屈であったに相違ない。しかし、君へのその結果は全然悪いものではなかった。君が大学へ入った時は君の英語の平均点はよほど低かった。65点以上はなかった。君はその後君の平均点を約90点に上げている。これは頗る大なる差異である。また90という点数も君の英語の力を公明に現わしはしないであろう。或る欠点があるがために、君は作文で100点をとることが出来ないけれども、英語の君の知識の範囲は確に90より高い数字で現わされることであろう。今や私に残る所は、君に他の種類の成功を望むことだけである。君自身の国語での文学的成功をである。

我が友にして、且つ学生たる大谷正信が、その文学的作品の売上高により、彼の大学における、3年間の出席中東京にての教育その他の出費に対して、私が前貸したる金額、総計425ドル。(この総額の中329ドル60セントは、1899年1月2日私に返却され、残額は、1899年6月30日より合衆国ボストンにおいて私の貸方記入となりいる)を全て私に返却したること、並びに同

EP 証  
紙券

人は、金銭上および他のことにおいて、私に対するあらゆる債務を脱したること。を証明するものなり。

ワイ・コイズミ®

(ラフカディオ・ヘルン)

訳者注：上記は封入の証書

#### 16. 宛名の書方。

同年9月27日

君の返事は、あれで正しかったのである。即ち Dear Miss B \_\_\_ が正しい形式である。だが、男子から年の若い娘への手紙は、その娘の家族と、いくらか親交があるものということを、予め仮定してのことである。そして、年若い娘は、普通には用事の通信はしない。例へば、ジョン・ラスキン (John Ruskin) は、後年ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti) 夫人になった娘に Dear Miss Siddal と宛名した。ジョン・ラスキンが、ただ一個の商人か、未知人であったなら、その女に向って Miss Elizabeth Siddal と宛名したことであろう。スペンサー氏は、或る年若い淑女に手紙を書いた時、それに Dear Miss Naden と宛名したが、その女は詩人であったから、文学的の知合がこのような形式の宛名書を至当ならしめるに足ることである。同情的関心と尊重とを含んでいるのである。

#### 17. ハーンの講義の筆記について。

同年12月16日

君の非常に親切な手紙は、木曜日の朝届いた。私は非常に多忙なので、余儀なくその返事を延引しなければならなかった。あの件（訳者注：大学で講義されたものの筆記帳を売ってはいけないかと、卒業してすぐ死んだ、訳者の同窓生牧野茅の家族に掛け合うこと）について、先方へ話してくれた君の労を大いに感謝する。君が言う通り（この問題については、君の方が、自分よりもよく知っているから）あの原稿に関して、牧野家を煩わさない方がよかろうと思う。私の思付は幾分早急であったし、何か間接に助になりはせぬかという考で行ったことでもあった。しかし、こんなことを考慮すべき見解に関して、君は全く新規な考を私に起こさせた。君なり志賀君なりに私が要求すれば、一週間ぐらいは原稿を貸してくれることであろうから、現在のところ、これ以上君を労する理由はないと思う。今後原稿に、参照する必要を私が見出したならば、君の好意につけこんで講義（の筆記したもの）の暫時の借用を願うことにしよう。

今のところ、私は先づ私の友人（訳者注：ミチエル・マクドナルド：Michele MacDonald）に相談しなければならぬから、頼みはすまい。友人は私に筆記帳は印行をしないと既に約束している。その筆記帳は要求次第手にすることが出来るものだから、これを他人の手に託する前に、その訂正等することを私はその上で明示しよう。だから少しも急ぐことはない。（以下略）

#### 18. 文学会とは。

1900年（明治33年）1月

文学その他の研究のための会について、私が賛成か或は不賛成かを述べてくれるようにと君が乞うのは、真面目な意見が聞きたいのであろうと私は思う。私の真面目な意見は君の気に入るまいと氣遣うが、それを君に聞かせよう。

現今日本には、あらゆる種類の全く無用な団体をつくろうとする狂熱が、不健全な狂熱がある。いろんな会が、ありとあらゆる目的を公言して、何百となく作られつつあり、作るのが早いと等しく早く解散されつつある。これは、他の多くの狂気じみた流行同様に、消えてゆく一つの狂気であるが、譬えん方ない害悪を流しつつある。そんな会が公言している目的は、何か有用な或る事をしようというにある。実際の目的は、話したり、食ったり、飲んだりで、時間を浪費するにあるだけである。時間の価値を知るということは、この国では未だ夢想だもされて居ない。文学或は芸術の研究は決してこんな会とは、何の関係もない。文学の、また芸術の、研究は個人の努力と独創的思索とに頼るものである。有名な書物を書き、有名な絵を描いた偉大な日本人は、助けてくれる会を必要としなかった。彼等は孤独でそして無言で仕事をしたのである。

立派な文学的著作はどんなものでも、少くとも独創的な著作はどんなものでも、会から出る訳はない。社交的団体は、個人的努力に、独創的思索に、本来反対している。文学研究の会というのは、文学の研究又はその作成を絶対に不可能ならしめるようになってくる会ということになる。文学会というものは無気力の証明であって、力の結合ではない。気力のある作家並に思索家は自分独りで仕事をし、又思索するものである。補助や同情や仲間を要しはしない。仕事をする自己

の愉快さで十分なのである。これまでに、文学会から出た大著作は一つも、独創的な大著作は一つも、ない。文学会は、文学を研究する目的でなら、全く無用である。文学の研究には、図書館がよりよい場所である。一番よい場所は閑静な自己の部屋である。私は例をもって言えば、シェークスピア (William Shakespeare) の脚本全部の翻訳ならびに出版のために作った会といったものには、それに反対なことは、何一つ言いはしない。しかし、翻訳ということは実際的なことであって、独創的な仕事ではない。最も高尚な意味で文学的研究でもない。しかし、辞書を作るということにさえ、どんな会も、孤独な学者の仕事に匹敵することは出来なかった。フランス学士会員全体をもってしても、リトレ：(Emile Littré, 1801—1881) が自分独りでやったような辞書を製作することは出来なかった。

私は日本のそんな会は、時間の有害な浪費を意味すると思うと言った。一層高等な研究をしに洋行する青年学者を思うて見よ。彼等は世界での最も博学な教授達に訓練され、あらゆる方法を尽して作家となるよう、独創的思索家となるようにと準備せられる。ところが日本へ帰って来ると、仕事をせよと励まされはせずして、いろんな会でその時間を浪費するよう、宴会に出席するよう、雑誌を編輯するよう、演説するよう、無報酬で講義をするよう、原稿を訂正するよう、仕事することを妨げるものと想像され得る一切の事物をするようと頼まれる。彼等は何事も為すことが出来ないのである。何事をもすることは許されないのである。彼等の学問と彼等の生涯とは、何事をも産み出し得ぬものにされる。彼等は権利をもった人間のように取り扱われず、使用さるべき、しかも無惨に使用さるべき機械のように取り扱われ、出来る限り早く消耗せしめられる。会に時間を浪費するこの狂熱が続く間は、日本の新しい文学なるものは見られまい。新しい戯曲もあるまい。新しい詩歌もあるまい。善いものはどんな種類のものも少しもあるまい。作成は不可能とされ、ただ外国思想の凡庸な翻訳があるだけであろう。時間というものの意義、仕事というものの意義、文学の神聖さ、これは現代には分かっていないのである。

それから新規な雑誌を創刊して何の役に立つのか。今は雑誌が有り過ぎている。雑誌を創刊しなくとも、君は君の欲する所のものを出版が出来る。雑誌を創刊すれば、余儀なく、迅速に、そして、下手に書かなければならぬことになろう。立派な文学的著作は迅速には出来ないもの、一定の時間内に、注文に応じて出来るものではないのだよ。新規な雑誌は、君がジャーナリストになろうと、ジャーナリスト以外のどんなものにもなるまいと、選ぶのでなければ、単に時間の浪費だけではない。金銭の浪費にもなるう。

自分は前述のように語りつつある。文学は非常に真面目なそして神聖なものであり、娯楽ではない、<sup>もてあそ</sup>弄ぶべきものではない。と私は思っているからである。君は莫大な授業時間数を持っていて、余分の重荷を背負っていることだから、君の健康を賭けて、君の頭脳を害せずしては、如何なる文学的仕事も企てることは全く出来はしない。もっと暇を与えてくれる地位を得ようとする方が、君には遙かに重要なことである。それから最後に、日本の学生や学者がただ英文学を研究するということには、私は余り同情をもたぬ。私は日本文学における新しい研究を耳にすること

を無限によしとする。新しい日本の文学を造ろうという唯一の目的をもってでなければ、私は英語の或は仏語の、ドイツ語の、研究に共鳴はしない。これが君への私の意見である。君がこのことを、たとえ、それを好かなくとも、考へんことを私は希望する。群集と共に仕事をやって見給え。決して偉大なことは何も出来はしないから。数年前、私は君に科学的な勉強をし給えと忠告した。その方が文学的著作の暇をもっと多く君に与えたことであろう。君は、そのようにしようとはしなかった。将来<sup>きつと</sup>後悔することであろう。しかし、君が再び忠言を欲するならば、それはこうである。会には入るな。頭に浮かぶ事を何でも書くな。君の今の乏しい時間を浪費するな。文学をば真面目に考へよ。それでなければ<sup>はう</sup>放って置けよ。君と君の細君とに万福を祈る。心からの祝賀を捧げる。（訳者注：畔柳芥舟、土井晩翠、戸沢姑射、浅野馮虚及び訳者が発起し、英文学科出身者を網羅し文学会をつくり、雑誌を発行する考で、先生に顧問となるようにと、訳者が依頼したのに対する返信。）

#### 19. 勤務についての同情と助言。

同年2月22日

君は多忙なのに私達のことを記憶していて、あの嬉しい手紙を書いてよこしたのは、ただの親切ではない。私は無上の感謝をする。そして皆の者からも感謝する。小さい子供等からも軽からず。私は君のことを<sup>しばしば</sup>考へている。君がそんなに辛い仕事をするなんて、気の毒にもまた腹立たしくも感じている。というのは、君を阻むそんな困難を私は少しも知らなかったからである。私は主に君の健康を心配していたのだ。君は大丈夫だと言うけれども、過勞から出て来る、君がそれについて何も知っていない危険が、神經過勞の危険がある。しかし、東京には変化が迅速にやってくる。だから、大して遠からぬうち、今よりも楽な地位を君は得ることが出来ようと私は信じている。君を世話して何かの地位につかせることが出来ればと思うのだが、君が知っている通り、私は東京の役人仲間に一人の友人をももっていない。“だから、何の勢力ももっていない”と自白せざるを得ない。そして、私はそうすることが出来るならば、大学で教えるよりも、君が勤めているその仏教大学で教えることを遙かに多く欲するものである。しかし、物事は思うようにならないものである。また、こうあるべき<sup>はず</sup>筈であると思うようにすらならないものである。給料が多ければ多いほど、その地位はいよいよ不愉快なものである。

私は今年、君がくれたあの歌を種種出版するつもりである。勿論、君に一部進呈しよう。その本は来秋までは世に現われまいと思う。私はまた蟬の文を敷衍して絵入の一章にした。その上に、日本の女の名についての、勿論、稍皮相的ではあるが、西洋の読者には十分興味があるものもその中にある。そのような題目に対して君が助けてくれたことは君が記憶している。

君が田舎へ行くことについて言うと（私はよくは分っていないけれども）安い給料で田舎の地位を得ることは無分別なことだろうと私は想像する。君が田舎で始めて安い給料を取ると、人はそのことを記憶しているであろう。そして従来よりよい就職への妨害となるであろうと私は思う。

田舎の方が今よりも幸福であろうし、君は今他にも考うべきことがあろうかと私は思う。だから、もし田舎へ行くなら、よい地位が出て来るまで辛抱して待っている方がよりよくなるだろうか。君は聽<sup>やが</sup>て東京で何かよりよい地位を得るであろう。そしてそのよりよい地位から、田舎での真によい地位を獲得するように取計うことが出来るであろう。(この返信に返事を書く義務があると君は思っ<sup>て</sup>てはならない。君は多忙だ。私はただ一寸の間おしゃべりをしているだけのことである。)

20. 著書に協力者としての名を出すこと。

同年5月11日

親切な挨拶に対して感謝する。家の者は全部丈夫である。そして君に宜しくと言っている。今度の切手はよい。或る外国の切手商人がその発行日に80ポンド分も買ったということである。この機会に、君のとんぼの文は非常に上出来であったと君に話さなければならない。2週間ばかり前にあれを作り終えた。来年(1901年)にその結果を印刷する積である。あの俳句を殆ど全部使用した。序ながら、私はその書物に、もし異存がないなら君の名を記載し、同時にその前の3冊に私に与えた君の努力のことも述べたいと思う。(後略)

#### 義務に忠実な人、ハーン

既に紹介したように、ハーンは在米の若い親友エルウッド・ヘンドリックへの返信(1895年1月)に述べている「今では時間程貴重なものは何もありません。無駄話を聞きに行ったり、結婚する見込みもない(既に妻帯しているから)美人を見に行ったり、時間つぶしにカルタをやったり、美しい事も、真実な事も語っていない手紙に返事を書いたりして、時間を浪費することは出来ません。(中略)その償に死ぬまで雷のように勉強します」と。また「私は長生はしないから急ぎます」と「人生の半以上を空費したから、これから取り返そう」とが、ハーンの口癖であったという。

上述のように考えたハーンは交際を避け、文通を止める等人事関係を絶って、一意専心著作の鬼となって刻苦精励することにした。過労のためであろうか。55才で狭心症のために、その波瀾の生涯を閉じたことは既述した。交際を絶つという彼の原則に、唯一の例外があった。それは彼の学生に対する場合である。学生達を「私の子供」と言い、その訪問には応じた。

ハーンに師事し後にその伝記を書いた人、田部隆次氏によれば、「**「帝国文学・小泉八雲号」**の「留任」と題する小山内薫<sup>おさないかおる</sup>の文中で、留任運動(筆者注:東京大学でハーンを解職したのを学生が納得せず数人の総代を選出し、留任運動のためハーンの自宅へ赴いた。)に行った3人の総代3年生安藤勝一郎、石川林四郎、落合貞三郎が二度まで門前払を食わされ、三度目に漸く会うことが出来たとあるのは、伝えた人の誤解である。彼等は一度も断られないで面会出来たのである。土井晩翠の場合も「ただ今散歩に出ています」と言われたので、そのまま部屋に入って待っていて面会した。前号に登場した安河内麻吉(内務次官在任中昭和2年没。ハーンは彼を家人に「男の中の男」と吹聴していた)が訪問した時には、その人と知らず、取次の者が断ったことが分っ



て後を追いかけて呼び戻した。私（田部氏）が明治36年に金沢から上京訪問して断られたので、名刺を残して立ち去ろうとして呼び戻された。学生が「先生のお宅へ参りたいのですが如何ですか」と聞くと、「用があるなら、ここで言ってくれ。家へは、なるべく来るな」と言うのが普通であった。それでも、富久町（又は西大久保）まで遠征して来る程に熱心な学生があれば、ハーンは彼等を歓迎した。これは多くの学生が体験したことであった”。ということである。迷惑と有難さが入り混った複雑な心境であったらうと筆者は想像するのであるが。

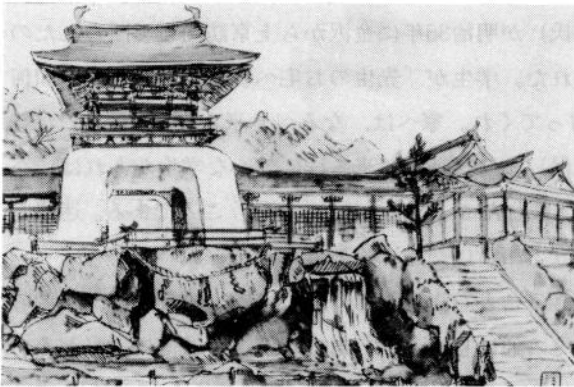
今やハーンは寸陰を惜んで、簡明直截に生きることを決意した。身の副次的なもの、余剰のもの、枝葉の一切を排除しようと決意し事実その通にしたようである。前述の通信に“私がそのために働くのが当然となっている人人のために働くのは、最大幸福だと感じてきた”。とあるように彼が義務と考えることに殉じようと（大袈裟に言えば）したのであろう。前掲の大谷に対する態度について、彼自身が“稍詳細の点に立ち入っているが”と言ふ程のそれや、学生の面会には応じたのも、そのように行動する義務があると信じたからであらう。大谷は「さもあれ自分が、三年間の大学の課程を了うるを得たのは全く先生の高恩の然らしむるところで、叩頭百万すと雖も感謝の意を表わし尽すべくもないのである」と述べている。（己がこと、人のこと）

England expects everyman will do his duty. 英国は、各人がその義務を尽すことを期待する。とは1805年にフランス・スペイン連合艦隊を、トラファルガー（Trafalgar）沖で破ったイギリスの提督ネルソン（Horatio Nelson, 1758—1805）の有名な言葉である、“Duty”（義務）という単語は、英国人（ジョン・ブル：John Bull）を、身も世もあらぬ心境へと駆り立てる魔力があるらしい。ハーンの素晴らしい名講義もこのような義務感に触発されてのことであらう。最高学府に学ぶ学生達がハーンに向って辞意の撤回を求めて騒いだのも無理からぬことである。覆水盆に帰らずであった。嗚呼。

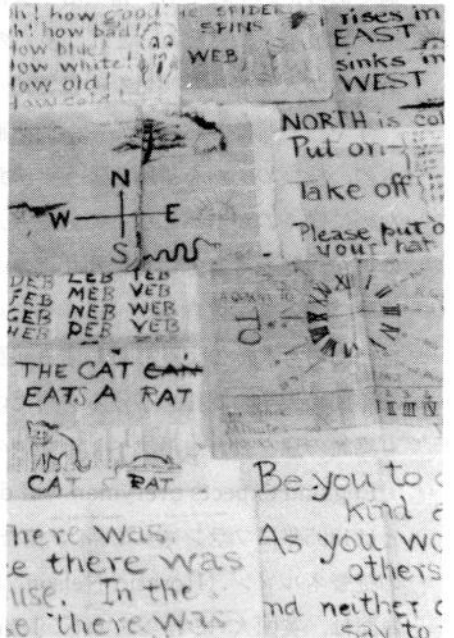
#### 参 考 文 献

- 小泉八雲全集（第一書房） 池野 誠著 松江の小泉八雲 雑誌へるん  
平井呈一訳：小泉八雲作品集 明治村通信

（未 完）



赤間神宮 下関市阿弥陀寺町 宮司水野久直画  
(ご祭神：第81代安徳天皇)



ハーンの長男・一雄に英語を教えた新聞紙利用の教材。



松江市小泉八雲記念館の内部  
ハーンの近眼に合わせた机と椅子。  
向って右方に座ぶとん、書類戸棚  
法螺貝（逗子で購入したもの煙草の火を欲しい時の  
合図に吹いた）左方のトランクはアメリカから持参



ハーンのKAIDAN（怪談）の耳なし芳一像。  
(赤間神宮にある)